

「朋有り、遠方より来たる、亦楽しからずや」多くの人が聞いたことはある一節であろう。『論語』に収録されている。論語は、中学校の国語の教科書に出てくる。そのため、何となくでも、そういういえば学習したなあという記憶はあるかもしれない。

論語は、孔子が書いたものではない。孔子の言行録を集めた書物である。孔子の弟子たちとの対話や教訓などが記されている。孔子の死後、何百年とかかって弟子たちが編纂したものである。論語には、有名な言葉が多い。「学びて時に之を習ふ」「巧言令色」などがある。

論語は、なぜ長い年月にわたり、読み継がれているのだろうか。そこには、人生と仕事の原理・原則がしっかりと述べられているからではないだろうか。物質的にどんなに発展しても、人間の本質は変わらない。その本質を磨いてくれるのが先哲の言葉であり、古典である。論語も、その一つである。

論語の言葉もそうだが、言葉というものは、自分の体の中で熟成され、人生の土台になっているよう思う。日々の生活に行き詰まったとき、ふと、言葉に立ち返ることがある。「己の欲せざる所は、人に施すことなけれ」という言葉が論語にある。自分がいやだと思うことは、人にはしないという意味である。人と関わる上で大切なことを、これほど端的に表している言葉は他にはないかもしれない。

人は、自分の性格や仕事について、あれこれと悩むことがある。そんなとき、「人の己を知らざるを患えず。人を知らざるを患う」という言葉がある。人が自分の実力を知ってくれないことを心配すべきではない。自分が他人のことを知らないことのほうが心配である。そういう意味である。

また、「これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」知っているだけの人は、好きになった人には及ばない。好きになった人も、楽しんでいる人には及ばないという意味である。「徳は孤ならず、必ず隣有り」徳のある者は、孤立することはないということである。

このような言葉は、人生や仕事で迷いや困難に直面したとき、いつでも取り出せるお守りのようなものである。書斎で探し物をしていたら、『論語』という文字が目に入ってきた。しばしの間、探し物をやめて、久しぶりに論語を読んでみた。スイスイ体の中に入ってくる感覚があった。まさに、お守りである。これからも大事にしていきたい。